

ようやくここに新しい『哲学の探求』をお届けすることができました。いずれも力のこもった論文をお寄せくださった執筆者の方々と、例年通り破格の低料金で印刷を引受けてくださった今日和印刷さんに感謝いたします。

本誌は一九九四年七月に伊豆下田で行われた「全国若手哲学研究者ゼミナール」の報告論文集です。当日発表されながらも掲載を見送ったものに、シンポジウム報告である稲生勝氏（岐阜大）の「現代諸科学の成果と認識論」、個人研究発表である村若修氏（鹿児島女子短大）の「物語と人格」があります。特にシンポジウムについては、当日の論戦の全体像をお伝えできない不完全なものとなってしまったことを心残りに思います。また、掲載した清水明美氏「義務としての最高善——その『道徳的意義』へのアプローチ」は、一昨年の若手ゼミで同氏が行った個人研究発表の報告論文です。

今回の若手ゼミは、「デイベート&ディスカッション」という新たな試みも加えられ、実り多きものであったと思われます。若手ゼミは同世代の研究者が手作りで運営する全国規模の研究会としては他に類例のないものであり、その存在意義は増大することはあっても、決して失われることはないでしょう。荒削りな若い力が腕試しを

する場、遠方の研究者の努力に励まされる場、学際的な様々な論点に出会う場、こうした出会いの場を求めている若手研究者は少なくないのではないでしょうか。

一昨年世話人の役をおおせつかって以来、多くの先輩にお力添えを頂きました。若手ゼミをより良いものにしてゆくという目標の下、たくさんの時間を割いて運営に携わってこられた方々に敬意を表すると共に、微力ながらこうした活動に参加できたことに喜びを感じざるを得ません。実は最もよい出会いを与えられたのは世話人な人もありません。また次の夏により多くの人と良い出会いがあることを期して。

（鈴木）